

神様からのギフト

【あらまし】

筆者、安立そらは韓国で生まれ、小学三年生の時に家族と共に日本へ来る。日本語がほとんど分からないまま小学校へと転入し、新しい友達と出会う。しかし、韓国の友達同士では当たり前だった、友達の名前を呼び捨てで呼ぶこと。それをきっかけにクラスのみんなから突然のいじめが始まる。「友達がいない」、「どうして私をいじめるの?」と毎日苦痛に耐える日々を過ごす中、彼女は少しずつ神からのお告げに気づく。

いじめを通して、「神様は、私をどんな時も愛して下さっている」と、彼女は、神様から自分へ与えられたこの世の使命に気づく。

●小見出し

韓国から日本へ
新しい学校と友達
友達がいない
神様との出会い
初めての聖霊体験
新しい自分
神様からの試練

韓国から日本へ

私の両親は国際結婚をして、父は日本人、母は韓国人である。私は九歳まで韓国に住んでいたが、小学三年生に上がった頃、家族全員で日本に帰国した。父としては、いつかは日本に帰ってくるつもりではあったが、日本の祖母が亡くなり、予定より早まった帰国だった。

私は、日本に来てから韓国学校に通わず、一般の市立小学校へ通った。初めて父と職員の方に挨拶に行った時、来年から共に学ぶ級友に挨拶しに行った。教室に入ると、図工の時間で、グループで机をくつつけて作業していた。自分と同学年であるが、なぜかみんな幼く見え、日本の小学生はかわいらしく思えた。担任の先生が紹介してくれたが、日本語がほとんど分からず、父に、「なんて言ってるの？」と聞き、「韓国から来たって紹介してるよ」と言われた。先生から自己紹介をお願いされ、人見知りで緊張していたが、父から教わった片言な日本語で、「かんこくからきました。あだちそらといますよ」と、語尾が余分な自己紹介をした。

新しい学校と友達

四月から、いよいよ学校に通った。韓国から来たということで、みんなとても不思議がって、私の周りにはたくさんの人が群がった。みんなが何を話しているのかよく分からなかったが、友人たちは親切にいろいろ教えてくれ、話しかけてくれた。授業もみんなと一緒に受けていたが、まったく意味が分からない。ひらがなを一つ一つ読み上げることが精一杯で、隣の席の友達が、「分かる？ 分かる？」と気にかけてくれたが、私はちんぷんかんぷんだった。

日本語が分からない私のために、担任の先生とは文章を書く練習を重ねて、毎日日記を書いて提出していた。日記は、韓国にいた時から毎日の宿題で日課として書いていた。先生は、その習慣を継続させて、日本語を習得すると同時に、日記を通して私のことを知り、近くなろうと考えたのだろう。最初に書いた日記を見ると、とても理解不能な文章になっている。

だい…あめ

あめがいつぱいふりました。わたしはふくがぬえちつた。いえにかいるからはいしやのいくからおじいちゃんといっしょにはいしよをいつてきました。わたしははかいたいかつた。いえかいるからふくがぬえちつた。でもかさかあるからたいじよぶたつた。

五月八日（一九九八）

韓国語の原文では、

제목… 비 오는 날

비가 너무 많이 와서 옷이 다 젖었다. 처음에 아침에는 비가 안왔는데 학교가 끝나고 나서 비가 너무 많이 왔다. 나는 옷이 다 젖어서 집에 와서 옷을 갈아입었다. 나는 또 치과에 가야 된다.

（題目…雨降りの日 朝は雨が降っていなかったのに、学校が終わると雨が降ってきてしまい、服が濡れたので

家に帰ってきてから着替えた）

とある。初めは、韓国語と日本語を両方書き、父が私の日記を点検し、日本語の原文の上から鉛筆で、二重線で消して文字を書き加え、促音を入れて修正してくれた。

自分としては、耳に入ってくる音を表したつもりでも、父から、「ㄹ」や「ㄷ」の使い方、促音、小さい「ㅇ、よ、ゆ」の使い方などをたくさん訂正されるのを見て、何が間違っているのか理解できなかったが、このようなことを続けていくうちに、少しずつ上達していった。そして、担任の先生は、毎日この日記をチェックし、コメントをくれた。

私は先生とのやりとりが交換日記のようで、日記の中で先生との会話を楽しんでいた。学校では、会話についていけなかったが、日記を通して先生と一対一で関わることが嬉しかった。

友達がいない

学校に通って一か月が経ち、友達が突然変わった。今まで

は授業後も毎日一緒に遊び、仲良くしていたのに、遊ばなくなった。日本に来て、何も分からない私をいつも助けて、遊んでくれる友達に、お札を重ねて、お母さんと選んだ髪結びを持って、友達の家に行った。すると、友達のお母さんから、「今日は遊べないみたい」と言われ、「プレゼントを渡してほしい」とだけ伝えて帰った。その次の日、友達から、「お母さんからプレゼントもらったよ。プレゼントなんかいらないのに、ありがとね」と言われたが、なんだか、いつもよりよそよそしい感じがした。

私は友達と仲良くなるにつれ、みんなの名前を、「みき！」「あやか！」「りな！」と呼び捨てで呼ぶようになった。そう呼ぶと、みんなの表情が変わり、友達同士が顔を見合わせ、おかしな雰囲気で見えた。私はその様子に気づきながらも、何がおかしいのか分からなかった。

ある日、友達の家でゲームをしていた時、私は勝負に燃えて、「早く！」と思い、友達の名前を呼び捨てで呼び、指をさしてせかした。すると、「そらちゃん、呼び捨てで呼ばな

いで！」と言われた。私は、「呼び捨て」がなんなのか分からず、「よびすて？ よびすてって何？」と聞くと、「日本ではね、名前は、ちゃん付けするんだよ。そらちゃん、ずっとうちのことに呼び捨てで呼んでるけど、ちゃんと『ちゃん』つけて呼んで」と言った。続けて、「あと、人のこと指さすのもいかんよ。悪いことしたわけでもないし、指さされると気分悪いから」と教えてくれた。

私は、思いがけないことを言われて驚いたが、「分かった。ごめんね。韓国では名前のまま呼ぶから、そう呼んじゃった。指をさすのも悪いことだと思わなかった」と謝った。

しかし、友達の間では、だんだんと評判が悪くなっていった。内緒話や影口が多くなり、私を見て嘲笑うようにひそひそとしている。今まで仲良くやっていたのに、なぜそのようなことをするのか。私は友達の変化にショックを受けた。

ある朝、学校に登校すると、下駄箱のうわぐつが片方なくなっていて、片方は水がいっぱいに溜められていた。自分の席につこうとしたら、近い通路は人がかたまっていて通れず、

遠回りした。すると、通る時に私が背負っていたランドセルが一人の男子生徒に当たったらしく、私はそれに気づかず自分の席に座って教科書を机の中にしまおうとしたら、かたまって話していた子たちがやってきて、「お前、今誠司にランドセルぶつけただろ！ 誠司の頭にぶつかっただぞ！ 謝れよ！」と言い、私の頭をぶった。

ランドセルをぶつけられたという本人は何も言わなかったが、周りから責められ、殴られ、私はついに泣きだした。その日は、全校集会があり、体育館に行かなければならない日だった。私は悔しく、叩かれたところが痛くて泣き続けていると、みんなは先生にばれるのが怖くなったのか、慌てて、「ごめんね。痛かった？」などと言いだした。

当時、私はこれが、「いじめ」だと分からなかった。韓国では、「いじめ」という言葉がない。嫌な人に対する嫌がらせはあるが、一人をターゲットに嫌がらせをすることを意味する、「いじめ」という言葉はないからだ。

私はこれが学級問題になるとも知らず、友達からされたこ

とを先生との日記に記していた。先生は当然、「いじめ」が発生したとみて緊張しただろう。今までは、日記をそのまま渡していたが、友達とこのことを書くようになってから、「誰かに見られてはいけないから」と、先生は大きい紙の封筒に入れて渡すようになった。私は、日記の内容を見て先生が何を思うかなど考えず、自分の日常の出来事として思いのままに書いていたため、先生がなぜ突然日記を封筒に入れるのかわからなかった。その時の日記。

だい…ともだちがいなくてつまらない

きょう たいいくのじかんに うまとびを したとき
ゆりなちゃんがせなかを つねっていきました。とても

いたかったです。それからゆりなちゃんと あいちゃん
と ゆかちゃんと まえは いっしょにあそんだのに

いまは あそんでくれません。いまは ゆりなちゃん
、ブン、というし、まいちゃんはぶつかってくるし、ま

いちゃんは たいいくのじかんに わたしに おとこ

だといいました。

五月十四日（一九九八）

先生は、私の日記を見て、どんな気持ちだっただろう。今だから、先生のコメントの意味や先生の気持ちが分かるが、当時は分からなかった。またある日、花火をしたことを日記に書いた時、先生からはこういうコメントがあった。

はなびをしたのですか。はなびのひかりを見ていると、とて もきれいで、じつとみつめてしまいます。せんせいもはなびがだいすきです。ところでそらちゃん、おともだちのことですが、そらちゃんからもこえをかけるといいんじゃないかな。ゆうきをだして。まず、『おはよう』のあいさつからやっごらん。どうかな。

五月十五日（一九九八）

私は、「先生がこんなこと書いてくれていたっけ？」と思

っているが、先生がそのようなコメントをくれていても、学校では何も変わっていなかったため、当てにしていなかったのかもしれない。

やがて、ハバにされることは当たり前となった。私は面白くないし、冴えない。だから嫌われて当然だ。そして、私はずっと持っているコンプレックスがあった。それは、小さい頃からポッチャリな体型で、周りの子よりも太っていることだ。

韓国にいた時から気になってはいたが、日本に来てみたら、日本の子は韓国の子よりも細身で、小さい。韓国では、男の子が強くて、女の子は文句も言えないが、日本の男の子は弱くて、女の子にいじめられていた。「日本の男の子は小さくて弱いなあー」と思っていた男の子たちから、「デブ」と呼ばれるようになった。私の体型は隠すことができないくらい目立つことだと自分で分かっている、それをストレートに言われ、とても屈辱的だった。男の子たちから、一番言われたくないことをはっきり言われ、もう自分にはなんの取り柄

もないと思った。ただでさえ、同性の女の子たちから嫌われて自信をなくしているのに、到底自分にはなんの価値も見出せなかった。

授業が分からず、勉強もだんだんついていけなくなり、学校では完全に自信喪失していた。「太っているから、運動もできないし、かわいくない」、「日本語も上手にしゃべれない」、「友達がいない」。

神様との出会い

私の家はキリスト教で、私も気づいたら父と母と教会に通い、聖書を学び、神様にお祈りをしていた。

日本に来て、家族で新しい教会を訪ねたが、私はなかなか馴染めなかった。日本語も話せず、学校では嫌われ、どうせ、ここでも友達なんかできないと思った。神様のことが嫌いになったわけじゃない。新しい環境に行くのはもう嫌だった。もうこれ以上嫌われたくないと思った。日曜日も教会に行かなくなり、たまに行くとしても子供礼拝ではなく、両親と同

じ大人の礼拝に参加し、何も話さず、ただ両親の横にくっついていた。でも、神様のことや聖書の中のイサク、ヤコブ、イエス様のことを教えてもらうのはとても刺激的で、教会で勉強することは好きだった。それは、幼い私の信仰心を燃えさせた。

相変わらずの友達の理不尽な仕打ち。「なんで私がこんな目に合わないといけないんだろう」と悩み、表面では優しい子ぶりをし、先生の前ではいい子ぶって、私にはひどいことをする。そんな友達の姿に矛盾を感じ、腹黒い人たちだと思った。

ある授業で、「はだしのゲン」というマンガのビデオを見た。戦争の話で、空襲をうけて父が家の下敷きになり、お腹に赤ちゃんを身ごもっている母をおいて泣きながら逃げるゲンの姿があり、小学生の私たちの心に戦争はいけないということを見事に訴えていた。私自身、涙もろくて必死に涙をこらえて見ていたが、授業後に泣き続ける女の子がいた。その子はまいちゃん(仮名)だったが、放課中も泣き続け

るまいちゃんに対してある子が、「まいちゃんは優しいんだね。うちのお母さんが言ってた、かわいそうな人見て泣く人はいい人だって」と言った。私はそれを聞いて、「まいちゃんが優しい？ いつも私にいじわるするのに？ 私だってあれ見て泣いたよ。それなら私もいい人なのに…。みんな、どうして私の前でそんなことが言えるの？」。そんな思いでいっぱいだった。そういう葛藤の中、教会で教えてもらうことは私の心の支えとなった。

小学四年生の時、今までの意識を変えさせられることがあった。いつものように礼拝を受けていて、その日はイエス様の十字架の話を説教だった。イエス様は、神の息子として、罪悪な世界を救うためにメシアとして地上に送られてきた。だが、メシアを待望していた当時のユダヤ民族は、イエス様をメシアとして信じなかった。メシアであるのに、貧乏で格好もみすぼらしく、父親がいないということ、人々に非難され、最後には十字架にまで架けられてしまう。

十字架で殺されてしまうイエス様は、どれだけ悔しく、辛

かったであろう。世のためにやっているのに、悪なるサタン（悪魔）の子だと言われ、十字架で亡くなられる時、辛いはずなのに、イエス様が最後に言っていた言葉は、「父よ、彼らを許してください。彼らは自分が何をしているのか分からないのです」という祈りだった。

私はこれを聞いて、ハッとした。「そうか、学校の友達たちは自分たちが何をしているのか分からないんだ。いじめがどれだけ人を苦しめ、傷つけるのか分からないだ」。それから、イエス様が自分を殺したユダヤ民族を許したように、私も自分をいじめる友達を許そうと努めた。「彼らは何をしているのか分からない。だから知らないふりをして許そう」。男の子たちの露骨に分かる嫌がらせ。女の子たちは相変わらず、視線を私に向けながらひそひそと話している。

ある時、友達から紙を渡された。見てみると、クラスの女の子の名前が全員書いてあり、一人一人に対して好きかどうかを○か×、あるいは△を付け、その理由も書いて、とあった。私は、耐えられない思いで、正直に書いた。「○○ちゃん

んは、いつも私のことを悪く言っているから嫌い」、「○○ちゃんは、いつも内緒話をするから嫌い」と書いて渡した。それを見て、友達たちはクスクスと笑っていた。心は傷ついていたが、私は見て見ぬふり、何も知らないふりをした。

できることなら、友達と仲良くなりしたい。私も輪に入りたい。だけど、こんな嫌味たらしく、人の気持ちを考えられない人なんかと同じになりたくない。それでも、友達に少し優しくされると心が揺らいでしまう自分がまた弱々しく、いやらしく思えた。

初めての聖霊体験

中学校に入ってから、「また嫌われる。小学校の時よりたくさんの人に嫌われる」。そんな思いで不安だった。教会も中学生になると、中高生の礼拝になり、両親とは違う場所の教会に通わなければならなかった。一度だけ父と挨拶に行つて、そこのお姉さんは優しく迎えてくれたが、「最初だから優しくするんだろうな」と思い、ずっと両親と大人の礼拝

に参加した。

中学一年の夏休みを迎え、父と母はいきなり私を連れ出した。どこに向かうのかと思つたら、教会の中高生対象、五日間のキャンプだった。私は、着いてから嫌だと猛反発し、帰ると言い張つたが、両親は私の話は聞かず、「がんばりなさい」とだけ言つて帰つてしまった。

中学生になつてから、中高生の礼拝には一回行つたきり。親もいなくて五日間もどうやって過ごすんだ、と不安になつた。参加者がどんどん集まり、わいわいしている中で、私はみんなの荷物が置いてあるところで、目立たないように座っていた。そこに、あるお姉さんが声をかけてきてくれた。「こんにちはー！ 何年生？ お名前は何て言うの？」と優しく声をかけてくれて、私はホッとしたように静かに話した。そのお姉さんは私が緊張していると分かつたのか、気遣つて、みんなの輪の中に入れてくれ、みんなでゲームをしたりして盛り上がった。

キャンプの中で、静かに神様へのお祈りや、神様に手紙を

書く時間があつた。私は、生まれてからのことを少しずつ書

(へブル人への手紙十二/五)

き、「実は、日本に来てからずっといじめられて苦しいんです、自分に自信がないんです」と綴った。最初は書きながら暗い気持ちになったが、書いていくうちに、「私の人生って神様が共にいてくださったのかな、神様が私の人生を導いておられたのかな」と思い、今までの自分の人生が全て意味あることに思えた。人間関係で苦しんだからこそ、人の気持ちを考えるようになった。自分がいじめられたから、人を傷つけることをやってはいけないということを学んだ。日本に来たのは、私自身がこうして人の気持ち分かるように、強くなれるように、神様が私を日本に送ったんだ、と感じ、涙が溢れてきた。同時に私はある聖句に出会った。

わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけない。主に責められるとき、弱り果ててはならない。主は愛する者を

訓練し、受け入れるすべての子を、むち打たれるのである。

この聖句を見て、神様は私を子どもと思い、親として私が苦勞するのを知って、私のために与えて下さったものなんだと感じた。学校では嫌われ、ブスと罵られる私だが、神様はこんな私を愛して、かわいい子どもとして思ってくれている。

今まで、親が信仰している神様としか見えなかったが、自分も導いて下さると心から感じ、何か暖かいものに包まれ、今まで抱え込んでいた恨みなどが解き放される感じで、涙がいつぱい溢れ、体がスーツとして、神様に抱かれている感じがした。そのような出会いをキリスト教では「聖霊体験」というが、まさに自分にもそのようなことが起きたと思ったら、驚きと感動で、興奮が冷めなかった。人生初めての聖霊体験後、私は人が変わったように明るくなり、神様が私を愛しているということが何より自信になって、前向きになった。

五日間のキャンプで、神様から見てみんな平等で同じ価値があるということ、人は、頭がいいとか外見がいいとか、外

的なもので判断するのではなく、心から人のことを思いやれるとか、内的な心の世界がもっと重要だということを学んだ。

新しい自分

人に対して壁を作らず、心を開いていこうとした時に、自分が今まで人に対して、いかに消極的だったかということに気付いた。みんなが自分の相手をしてくれない、私のことをバカにする、とばかり思っていたが、自分こそ友達に対して何もしていなかったじゃないか、と思った。

小学生の時、担任の先生が、「そらちゃんからもこえをかけるといいんじゃないかな。ゆうきをだして。まず、『おはよう』のあいさつからやってごらん。どうかな」と書いてくれたように、自分からは声もかけず、周りの人が何かしてくれるのを待つだけだった。

だから、友達としても、「せっかく親切にしているのに、なんの反応もなかったら気分悪くなるよな」と、私をいじめた友達だけが悪いのではなく、何の反応も返さなかった私に

も問題があったということに気付いた。

五日間のキャンプで学んだことを胸に、二学期が始まり、私は学校でも積極的になった。今までは人目を気にして、声もあまり出さなかったが、「みんなも優しい心を持っているから、私が誠実な心を持って臨めば、きっとみんなにも思いが伝わる」と信じて、一生懸命に取り組んだ。

二学期には音楽会の行事があり、合唱の練習に対して不真面目な男子生徒に声を張り上げるようになった。小学校から私を知っている友達は、そんな私の姿は見たこともなかったので驚いていた。

その時、小学校が一緒だったみほちゃん（仮名）と同じクラスで、席が前後だった。小学校の時は私を皮肉ってきたみほちゃんだったが、中学で同じクラスになってからたくさん話し、関わるようになった。

ある日、みほちゃんは後ろを振り返って、私に、「そら、変わったね」と言った。私が、「え？」と聞き返すと、みほちゃんは、「ごめんね」と言った。私は、「えー！ 突然なん

で謝るの？」と言うと、みほちゃんは笑って前に振り返った。私は、彼女の「ごめんね」がどういう意味なのか分かった。きっと今までしたことを謝罪してきたのだろう。私はとても感動で、同時に申し訳なかった。

もしかしたら、謝らないといけないのは私のほうかもしれない。この私をもう一度受け入れてくれて本当に有難い気持ちだった。彼女の一言は、小学校時代の友達全てを代表した言葉に聞こえた。私は、神様のおかげだな、と感謝した。

神様からの試練

中学、高校を卒業し、私はもつと人格的にも成長したいと思った。私は大学生になってから、同じ教会に通う大学生たちで集まり、お互いに刺激を与え合いながら活動をしていた。「プロジェクトX」や「アンビリバーボー」など参考になるVTRを見て、世の中で成功した人の話から、その人がどういう人生を歩んできたのか、どうやって困難を乗り越えて来たのか、ということの研究し、みんなでディスカッションを

していた。

その研究をする中で、彼らの共通点は、世のため、人のために生きていることだった。企業家であれ、医者や消防士、コツコツと町や村のために頑張っている人は、自分のためではなく、自分よりも大きなもののために自分の全てを捧げて生きていた。

私たちは、そのような歩みに感化され、自分たちも、「より大きなことのために生きる人生にしたいね！」という意識が高まった。それから、どうしたらそのような人生にすることができんだろう、と考え、まずは自分の隣にいる身近な人たちのために生き、愛していけるチャレンジをしていきたいと思います。

大学の同じ英語のクラスで、とても消極的な矢田明日香（仮名）という子がいた。その子は英語も苦手で、授業でネイティブの話すことがよく分からず、みんなでグループワークやる時は、一つ一つ教えてあげなければならぬ感じだった。

そのことに、クラスの子たちもイライラした様子で、彼女の席の近くにはあまり座らなかつた。私も苦手だな、と思つたが、そう思つた瞬間、「この子のために生きよ」と、神様から与えられた環境だと感じた。自分の心で、そう感じたのなら実践するしかない。

私は彼女の隣に座ることを決意した。週5回の英語の授業のうち、4回は同じクラスで、毎日隣に座り、色々教えてあげられるようにしていた。しかし、私も彼女の理解不足にイライラした気持ちを感じた。「なぜこんなに一生懸命説明しているのに分からないんだ?!」という非難の思いがわいてきた。この学科選んだんだ?!」という非難の思いがわいてきた。私は、彼女を愛せないことに悩み、一緒に活動している年上のお姉さんに相談した。すると、「人が愛せない時、自分にもそういう部分があるから愛せない」と言われた。私は「え??」と思ひ、「私と明日香ちゃんは違う」と思わず否定してしまいたくなつた。

でも、よく考えると、たしかに自分と似ていた。昔、私が

日本に来たばかりの時、日本語がよく分からず戸惑つて、友達とうまく話せなかつた。そして、私のために一生懸命やってくれる友達に対して、何の感謝の気持ちも表わさなかつた。「私と同じだ:」と、彼女と私の共通点が見えた。

人間というものは本当に卑怯だな、と思わされる。自分がしてもらつたことはよく忘れ、自分がしたことはよく覚えてゐる。私も周囲の人に愛され、許され、そのおかげで生きてゐるのに、それを忘れ、傲慢にも自分一人で全てのことを成してきたかのように錯覚する。

明日香ちゃんに対して、自分は偽善者だと思つた。表面的には親切にしているけど、心の中ではどこかバカにしていたり、「してあげよう」という上から目線になっていたのかもしれない。心は全然純粹ではなくて、こんな自分の心が汚いと思つた。自分がしたいということを一方的にするのは迷惑になるし、相手のやることを奪つてしまう。そう思ひ、彼女が誰かの助けが必要な時だけ私が登場しようと思つた。

そうする中で、少しずつ心が通うようになって、明日香ち

やんから質問してきたり、話してくれるようになり、私も心から笑って話せるようになった。彼女と心が通じることによって、私は人生で二度目の壁を越えた勝利感を感じた。